

P1-007

5歳児がからだを学ぶ健康教育プログラム「からだのお話会」の開催を目指した、「からだ先生研修会」の展開

瀬戸山 陽子¹、村松 純子²、原山 千咲³、
菱沼 典子³、淵 純子³、島田 恵³、白木 和夫³¹東京医科大学、²BABY in ME、³NPO法人からだフシギ

【背景と目的】

人はからだの基本的な知識を持ち、命や日常生活の大切さを理解し、健康を守る日常生活を構築して、保健行動における「市民の主体性」を発揮できる（菱沼他、2006）。そのためには、幼少期から自分のからだを当たり前学ぶ機会が重要である。

我々は5歳児がからだを学ぶ教材やプログラムを開発し、保育園や幼稚園で使用しながら改良を重ねてきた（後藤他、2008）。「からだのお話会」に参加した子どもは、「からだの仕組み」や「日常生活の大切さ」を理解し、「健康を守る日常生活行動の構築」を行っていた。また子どもが親やきょうだいにからだについて話す様子も見られた（大久保他、2008；瀬戸山他、2021）。我々は、より子どもの日常の中でからだの話をする機会が展開されることを目指して、それぞれの場で「からだのお話会」を開催することをねらった「からだ先生研修会」を開催しているので、報告する。

【研修会の方法】

研修会の対象は、「子どもにからだのことを伝えたいと思う人」とし、誰でも参加可能とした。2016年8月に第1回を対面で、第8回以降はオンラインで開催し、2022年2月現在までに12回開催してきた。

【結果（参加者とプログラムの内容）】

これまでの参加者は169名で、女性は164名だった。職業は不明が40名いるが、看護師が59名（そのうち保育園等の看護師が18名）、看護学生12名、図書館司書や図書館スタッフが12名、保育士9名、助産師7名、その他、主婦、理学療法士、鍼灸師、製薬会社勤務などだった。プログラムは、第1回目は10～16時、第2～7回は13～17時、第8回目以降のオンライン開催では10～12時とした。直近の研修会では、最初に子どもにからだを伝える意義や、5歳児対象の根拠を説明した後、お話会の場所や教材、話し手、プログラムの内容例を紹介した。またお話会の実演者が体験を話し、子どもがお話会に集中できるよう促す方法（活動、導入）として、手遊びの紹介を行った。さらに参加者全員が教材絵本を読みきかせるからだ験を行い、その後は全からだでの質疑応答やディスカッションの時間とした。

【考察】

参加者からは、「子どもにからだを伝えることの重要性が分かった」などの感想が得られ、好評である。参加者は研修会後に図書館や保育園などそれぞれの場で子どもにからだの話をしており、その広がりや子どもへの影響を今後追っていく予定である。

P1-008

保育所職員を対象とした食物アレルギー研修会についての検討

玉村 尚子¹、横山 由美²、吉原 重美³¹獨協医科大学看護学部、²自治医科大学看護学部、³獨協医科大学小児科学

【背景】

保育所に通園する食物アレルギー児の割合は増加しており、保育所職員が食物アレルギーの知識や技術を獲得する必要がある。保育所職員を対象とした研修会について検討することを目的とした。

【方法】

医学中央雑誌、PubMedを利用して、保育所職員を対象とした食物アレルギー研修会に関する文献を抽出し、検討した。

【結果】

講習会は、アレルギーに関連する医療機関や医師会、小児アレルギーエデュケーター（以下、PAE）や看護師が実施していた。講師は、アレルギー専門医を含む医師、薬剤師、PAE、看護師などであった。講習会の内容は、食物アレルギーの基礎知識、緊急時の対応、エビペントレーナーを用いた実技指導、意見交換会であり、開催時間は、40分～90分であった。研修会に関する質問紙調査を実施した時期は研修会前後、研修会后、4～12週間後、6か月後であり、研修会前後の比較が最も多くみられた。課題として、保育所職員は、研修会に行事と重なり参加できない、日程が合わない、人手がなく参加できない、要望として、オンラインやDVD等での研修、大きな研修会ではなく、保育所を対象とした研修を希望していた。

【考察】

保育所職員が食物アレルギーを持つ子どもや保護者に対応できるように食物アレルギーの知識については、参加しやすいオンライン研修会、エビペン[®]の実技などに関しては対面型での実地研修会の検討が必要であると考えられる。